

## 話題間関連性と話題終了から見る話題開始表現の使い分け

朱怡潔

話題に関する従来の研究では、先行話題との内容的関連性により開始部に用いられる表現が異なると指摘されている。しかし、時間の流れに沿って進行していくという会話の性質を考えると、先行話題が終了しているかどうかということと、終了後すぐに後続話題が導入されるかどうかということが話題開始表現の生起環境であり、開始表現の使い分けに影響を与えることが予想される。そこで本発表では、日本語母語話者の雑談会話（6 会話，計 3 時間 19 分）を対象に、話題間関連性・話題終了の仕方・話題開始のタイミングの 3 つの要因から、話題を導入する際に開始表現がどのように使い分けられるかを明らかにした。その結果、以下の 5 点が得られた。(1) 直前より前の話題を再び導入する「復帰型」と「再出型」では、関連性を示すことが優先されるため接続詞等の関連性表示表現が多用される。(2) 全く言及したことのない「新出型」と、参加者同士で相づち等の終了表現が交わされていない「未完結」の後の話題の導入では、唐突さを緩和するために「あ」「え」のような認識の変化を示す表現が多用される。(3) 「新出型」と、相手がまだ話し終わっていないのに割り込むという「割込型」では、聞き手理解の負担を軽減するために「ねー」「聞いて」のような呼びかけ表現が多用される。(4) 先行話題の周辺的な語と派生関係にある「接線的派生型」と、参加者同士で相づち等の終了表現が交わされている「完結」の後の話題導入では、話題の焦点を明確に提示するために「とか」「って」のような表現が多用される。(5) 先行話題の中心的な部分と派生関係にある「典型的派生型」では、話題方向の転換に伴う不確かさを表示するために言いよどみ表現が多用される。このように、話題間関連性に加え、先行話題の終了の仕方と後続話題の開始のタイミングも開始表現の使い分けに関わっている。開始表現の使い分けは、次に導入する話題の内容を聞き手に予告し会話理解を助けると同時に、話題を導入する際に伴う話し手の躊躇を示したり、会話主導を回避したりすることで、良好な人間関係を保つことにもつながると考えられる。